

森 鷗外 と E. T. A. ホフマン

—ホフマン受容史の一断面—

今 田 淳

二等軍医鷗外森林太郎がケルン経由でベルリンに着いたのは1884年10月11日の夜8時30分であった。「十一日。午前七時。達德國歌倫。余解德國語。來此。得免聾啞之病。可謂快矣。午後八時三十分。至伯林府。投於德帝客館。問田中、片山等。皆未到也。」¹⁾。それから僅か13日後に彼は、当にドイツ文学者森鷗外漁史の開始を意味する象徴的な文字²⁾を『獨逸日記』に記したのである。「二十四日。……大學より歸れば、英語の師イルグネル Ferdinand Ilgner 我房にありて待てり。語學の師は多く貧人なれば、往いて學ぶ徒弟なく、必ず來て教ふるなり。夜は獨逸詩人の集を涉獵することと定めぬ。」³⁾。10月22日午後5時30分ライプツィヒに着いた鷗外は、翌23日には大学で指導を受けるホフマン教授 (Franz Hofmann) を訪ね、未亡人ヴォール夫人 (Frau Eduard Wohl) の家に仮寓を決め、更に翌24日の日記にこの文章を書いたのである。ドイツに到着して僅かに二週間、未だ陸軍派遣留学生としての生活も始まったとはいえない、最初の研修地ライプツィヒでの生活が漸く始まるかという時期に書かれたこの文章は、鷗外が留学の当初からドイツ文学に深い関心を寄せていたことを示しているわけで、その意味するところは決して小さくないのである。勿論鷗外のドイツでの生活を見渡せば一層明らかになるわけだが、この日記の一節からだけでも、「自分がまだ二十代で、全く處女のような官能を以て、外界のあらゆる出來事に反應して、内には嘗て挫折したことの無い力を蓄へてゐた時の事であった。自分は伯林にゐた。」⁴⁾という有名な『妄想』の書出しの部分が、実は留学初期のライプツィヒでの生活を背景にしていたのだとの推察が可能になるのである。しかし、如何に処女のような官能を以てドイツ文学に反応しようと思ってみても、衛生学の研究を本務とする鷗外の身では、系統的にドイツ文学の作品を読むということは不可能であったし、全く読書出来ないという時期も当然あったのである。実証可能な範囲での鷗外のドイツにおける読書調査から判断すると⁵⁾、同宿していた動物学者の飯島魁が去って⁶⁾、その部屋に移った1885年4月下旬から、鷗外の読書生活は

快適そのものになったようで『獨逸日記』にも次のように書いている。「十三日。……飯島の去りてより、余は其舊室に遷れり。架上の洋書は已に百七十餘巻の多きに至る。鎖校以來、暫時閑暇なり。手に隨ひて繙閱す。其適言う可からず。盪胸決眦の文には希臘の大家ソフオクレエス、オイリピデエス、エスキュロス Sophokles, Euripides, Aeskylos の傳奇あり。穠麗豐蔚の文には佛蘭の名匠オオネエ、アレキイ、グレキル Ohnet, Halévy, Gréville の情史あり。ダンテ Dante の神曲 Comedia は幽默にして恍惚、ギョオテ Goethe の全集は宏壯にして偉大なり。誰か來りて余が樂を分つ者ぞ。」⁷⁾。その読書の中心となったのはハイゼ、クルツ共編の『ドイツ短篇集』⁸⁾であったが、4月17日から9月28日にかけて全24巻85篇中の46篇が読まれ、読んだ感想と日付けが記入されている。残りの39篇中、読後感と日付けの記入からドレスデン滞在中に読んだと確定出来るものが8篇、その他の31篇については読後の感想だけが書き込まれているので推測の域を出ないが、大半はライプツィヒ時代に読んだと見做してよいようである。鷗外はこの短篇集を通じて E.T.A.ホフマンに出会ったのだが、順番に読んでいったわけではないので、第一巻に取められている „Das Fräulein von Scuderi“ を実際に鷗外が読んだのは8月10日頃で、「深夜讀之、使人不覺慄然。乙酉八月。」という読後の感想を残している。八月としか書いていないので確定出来なかったのだろうが、寺内氏は8月12日と日付けのあるものに続けて13日の前に、小堀氏は8月に読んだとだけ書かれている3篇の中の三番目として8月11日の前に並べている⁹⁾。8月11日以後は日付けがきちんと入っていると考えられるので、小堀氏の方が正しいのだろう。『ドイツ短篇集』に加えられている E.T.A.ホフマンの作品はこの一篇だけであるし、次いで鷗外が読んだとされている『新ドイツ短篇集』¹⁰⁾には一篇も含まれていないので、鷗外がドイツ滞在中に確かに読んだといえる E.T.A.ホフマンの作品は „Das Fräulein von Scuderi“ だけである。そして鷗外が当初 E.T.A.ホフマンに対して抱いていたイメージは、『ドイツ短篇集』のはしがきに紹介された奇人としてのものであり、「人をして覺えず慄然たらしむ」物語の作者としてのものであったと思われるのである。ではその奇人ホフマンに対して、鷗外はそれ以上の関心を示さなかったかという点必ずしもそうではない。奇人としてのイメージを払拭するだけのものとなりえたかどうかは確かではないが、既にドイツ滞在中に鷗外はクルツ編の二巻本の『ホフマン作品集』を購入し、その一部は少くとも読んでいたと思われるのである。発行年次がないこともあって、購入と読んだ時期を推定することは非常に困難だが、『玉を懷いて罪あり』を翻訳した時の原本として使われたことが一つの目安とはなるだろう。翻訳の時

期も考慮にいれると、鷗外が全然目を通さないまま持ち帰ったとは考えがたいのである。収められている物語は、第一巻が „Die Serapions-Brüder“ から順不同ながら „Das Fräulein von Scuderi“ など11篇、第二巻が同じく „Die Serapions-Brüder“ から „Der Artushof“ など5篇、 „Fantasiestücke in Callots Manier“ から „Der goldne Topf“ など6篇、 „Nachtstücke“ から „Das Majorat“, そして遺作ともいえる „Meister Johannes Wacht“ の計24篇である。

1888年9月8日、約4年間の留学を終えて帰国した鷗外は、多忙であり且つ内外の情勢から憂鬱な気分であったにもかかわらず¹¹⁾、早くも翌1889年1月から2月にかけて『調高矣洋絃一曲』¹²⁾、『綠葉歎』¹³⁾と題してカルデロン、ドーデエの作品を翻訳したのに続いて、3月に入ると „Das Fräulein von Scuderi“ を『玉を懐いて罪あり』として『讀賣新聞』に発表し¹⁴⁾、以て我国における E.T.A.ホフマンの最初の翻訳者となったのだが¹⁵⁾、その時鷗外が翻訳の原本にしたのは『ドイツ短篇集』ではなくて『ホフマン作品集』であった。このことは鷗外が E.T.A.ホフマンの作品を „Das Fräulein von Scuderi“ 以外にも知ったということをも意味しているのであって、鷗外と E.T.A.ホフマンとの関係を探るのに興味深いことなのである。奇人ホフマンというイメージとは相容れない作家ホフマンの作品を鷗外が知ったということになるからである。鷗外がそれらの作品を何時、何処で読んだのかは確かめることが出来ないが、ドイツ滞在中に読んでいたと考えるのが妥当なようである。

明治二十二年(1889)八月発行の『國民之友』第五十八號夏期附録に「於母影」と題して掲載された19篇の詩の中に、鷗外の妹小金井喜美子が訳した「わが星」という詩があった¹⁶⁾。原作者名が「ホフマン」と挙げられていたのに、岩波版『鷗外全集』の底本となった『水沫集』では「失名」となっているこの詩は、元来『ホフマン作品集』に収められている „Meister Martin der Kufner und seine Gesellen“ の中で、失恋の傷を癒やそうと主人公 Friedrich が思い出の丘に登って歌う詩として挿入されているもので¹⁷⁾、この物語を読んだ者にしか到底見付けることの出来ない詩であって、当時鷗外以外にこの詩の存在を知っていた日本人はいなかったろうし、小金井喜美子も鷗外の示唆で訳したと思われるが、そのことは即ち、鷗外が „Meister Martin der Kufner und seine Gesellen“ を読んでいたことを証明することになるのである。後になって詩人でないホフマンの物語のどこに挿入されていたかを探することは、多少は煩瑣であったろうが「失名」には何となくひっかかるものを感じる。E.T.A.ホフマンのイメージを奇人で統一すること、奇話作家で通すことに何らかの意味を見出し、抒情詩人たるホフマンが不要に

なったからということではないだろうか。それにしても帰国後の慌しい生活の中で、以後も自らは奇人、鬼人としての紹介しかしない E.T.A.ホフマンの詩を、妹を通じて「於母影」に翻訳、発表させたということは一体何を意味しているのだろうか。更に „Der unheimliche Gast“ にも「天然怨声」,「金響」,「虚聴 Gehörshalluncin」などの書き込みがあり¹⁸⁾、鷗外が『ホフマン作品集』の第二巻も読んでいたことを証明している。後述の『改訂水沫集序』によれば、鷗外は E.T.A.ホフマンにさしたる関心を寄せてはいないかの如き印象を与えるが、実際にはそうではなかったのではないか。最初に „Das Fräulein von Scuderi“ を読んだ時は確かに異様な感じにとらわれたであろう。しかし何らかの関心があってその後二巻本の『ホフマン作品集』を買って読んだ鷗外は、奇人、奇話作家と思っていた E.T.A.ホフマンの中に抒情的な詩をも創る別な面を見出した。自分の文壇での活動の助けとなりうるのは奇話作家としての E.T.A.ホフマンであると思ってみても、それで押し通すだけの確固たる自信を持ち得なかった鷗外は、E.T.A.ホフマンに対して無関心であり続けることが出来なかったのではないか。それが詩人ではないホフマンの、しかも物語に挿入された詩を妹の手で世に送らせようとした原因なのではあるまいかと思う。自分で訳さなかったところに文壇に登場しようとしている鷗外の計算があるように思う。自身はあくまでも E.T.A.ホフマンを奇話作家としてのイメージで語り続けようとの意図を感じる。鷗外が言及した E.T.A.ホフマンに関する言葉を少しく解釈して、そのあたりの事情を多少とも明らかにしてみようと思う。鷗外が E.T.A.ホフマンについて得た知識は大半が『ホフマン作品集』の序文からである。『ドイツ短篇集』のはしがきに言及している箇所があるが、翻訳の原本としては使わなかったのであるしそれほど種明かしにはなっていない。この事実に鷗外の意図を感じるのは私だけだろうか。一見種を明かしたように思わせながら、そこには書いていないような知識を披露するのである。大抵の人はその博識ぶりに圧倒されてしまうだろう。文壇での活動を開始するにあたって鷗外が考え出した戦術であったと思う。

* * * * *

而れども權に小説を分ちて複稗、單稗、奇話（メエルヘン）の三とせんに、奇話は必ずしも出来得べき事實にあらず、必ずしも有得べき情況にあらず。獨逸の文界にてもギョオテの頃までは出来得べからざる事情と有り得べからざる情況との單複二稗の境地を侵略したること甚多し、「ロマンチック」派のホフマンなども此癖尤著かりき。今や奇幻怪誕の事は單複二稗の境中を逸し去りて、「メエルヘン」

の域内に集りしのみ¹⁹⁾。

これは小説を複稗（ロマーン）、単稗（ノヴェレ）、奇話（メルヘン）の三つに分類して出版月評を批評しているところだが、その評の当否は別にして²⁰⁾、ここでは E.T.A.ホフマンとの関連で解釈してみたい。鷗外は明らかにホフマン＝奇話作家という図式を提出しているのだが、その背景にはクルツが『ホフマン作品集』で書いている文章がある、完成された見事なメルヘンの例として „Der goldene Topf“ が第一に挙げられているのである：

Bei der großen Anzahl von Erzählungen, die er gedichtet, ist es begreiflich, daß nicht alle von gleichem Werth sind; aber es wird kaum Eine zu finden sein, die man als ganz verfehlt bezeichnen könnte, während viele als *vollendet und meisterhaft* erklärt werden müssen. Eine solche ist zunächst „*Das Märchen vom goldenen Topf*“, in welchem er die Märchenwelt mit den modernsten Lebensverhältnissen auf das Glücklichste zu versmelzen weiß – was übrigens auch in manchen andern Erzählungen anzuerkennen ist – und worin er den Gegensatz der Prosa und Poesie im Leben und Gemüth auf das Anschaulichste zur Erscheinung bringt.²¹⁾

自分が読んだ E.T.A.ホフマンの作品を鷗外はすべて奇話だと見做していたのか、或いはただホフマンが奇話を好んで書いたとだけ考えていたのか、実際の作品にあたって鷗外が単稗と奇話とをどのように分類していたのか不明であるが、少なくとも奇話というジャンルにおいては E.T.A.ホフマンを先ず挙げていることに一応注目しておいていだろう。当時の日本の文学界で最も不振なジャンルが奇話であったらしく²²⁾、それだけに鷗外としては自らの手で奇話というものを日本に移し植えることに大いに胸を張りたい気持もあつただろうし、そういう鷗外の意識の中に、たとえその一面だけしか理解されていなかったにせよ、E.T.A.ホフマンは自己の存在の根をしっかりと下していたことになるのだから。

* * * * *

獨逸の小説家の中にて、鬼才とも稱せらるべきはホフマンなり。此人の名をエルンスト、テオドル、キルヘルムと云へりしが、或著の原稿を浄書せしめしとき、寫字者誤りてエ、テ、ア、と書きひがめたるを、その儘印行せられぬ。このア字はもとキルヘルムの略なればキとあるべきなれど、ホフマンは心にもかけず、程經て名聲漸く高くなりし時人に向ひて既にア字にて行はるゝ上は、これを改むるに及ばざるべし、況や此貨幣の通用世に許されればと戯れ、それよりキルヘル

ムと稱せず、みづからアマデウスと稱しき。此人の作はさいつ年譯せし玉を懷いて罪あり（水沫集二五七面）といふ小説にて其風を知るに足らむ。或人其文を評して、寫出したる人物皆慙慙に挨拶すれど、實は猫などの化けたるにて、いつか爪を露して面を傷けあふならむと思はるといひしが、現にしかおもはるゝところなきにあらざ。パウ、ハイゼ等が古今單稗集といふ書を著はしゝとき、ホフマンが作のうちに極めて妥なるものをとて、かの玉を懷いて罪ありといふ一篇を取りしが、そのをりの端がきに。ホフマンが怪しげなる文字は、美術上片倚りたるものなること論を待たざれども、これを作りし當時の文人社會のありさまをおもひやれば、深く咎むべきにあらざ。ある時ホフマン友あまた集へて酒を勧めたりしが、遽に席を起ちて、肉さしの尖もて皿の面に輪を書き、獨ごといふやうに、席末より何番目に坐したる何某は、氣の毒ながら氣に喰はねば、早速歸られたしといひぬ。指されし人は一も二もなく其座を却きぬといふ。かゝる事を實際にいひもし行ひもして怪しともおもはざりし世なればこそさる不思議なる小説も出來しならめ。この話を聞きて後にホフマンが小説を讀まば今までいぶかしみしことも、世の常のやうにおもはるべしとあり。ホフマンは法學士にて、其長技は文章のみならず、樂をも畫をも善くせしかば、ポオゼンにありて、法官を勤めしころ、丹青の技のために昇級を妨げられ、遂にプロツクといふ僻地に遷されしことあり。その顛末を聞くに、この人例の癖を文人社會にて行ふを足れりとせず、公の人々を嘲らむとて、戲畫あまた作り、其側に可笑き文を題して、人に見せけるを、長官いたく惡みて伯林に報告し、昇級の辭令の署名のみまだ濟までありしを破棄せしめきとぞ²³⁾。

鷗外がさも E.T.A.ホフマンの伝記でも読んで調べたかの如く物知顔に述べているこの文章も、実は殆どが『ホフマン作品集』の序文から引いているのである。例えば「キルヘルム」と「アマデウス」の件は序文の脚注に次のように記述されている：

Auf den Titeln seiner Bücher steht E. T. A. (Amadeus) ; Dieß hat seinen Grund darin, daß auf Einem seiner ersten Manuskripte durch einen Schreibfehler ein A. statt eines W. stand, und da er einmal unter dieser Bezeichnung bekannt geworden war, wollte er sie nicht mehr ändern. „Da ich einmal mit dem A coursier“, sagte er, „und die Münze gangbar ist, so mag ich es nicht ändern.“²⁴⁾

「パウ、ハイゼ等が……」の箇所は鷗外が唯一 E.T.A.ホフマンに関する知識の出所を明かしているところだが、この書からの知識は以後殆ど使うこともないので、鷗外にしてみればホフマンに関する知識の源を明かしたことにはならないのである。「ホフマンは法學士にて……」の部分も、クルツの文章を鷗外が巧に要約したのであって驚くにはあたらない：

....., ob er gleich den Schulaufgaben wenig Zeit widmete, da ihn seine immer mehr hervortretende *Neigung zur Musik und Malerei* ganz in Anspruch nahm. Nach vollendeten Schulstudien bezog Dieser die Universität seiner Vaterstadt, um *sich der Rechtswissenschaft zu widmen*. Er besuchte die Vorlesungen mit gewissenhafter Pünktlichkeit; die ganze übrig bleibende Zeit widmete er auch hier *den Künsten*. Da nur wenige Persönlichkeiten ihm an Geist ebenbürtig waren, so ist es erklärlich, daß er sich zum größten Uebermuth hinreißen ließ; dieser verleitete ihn auch zu einem Unternehmen, das ihm viele bittere Stunden zuzog und seine Versetzung an einen noch traurigeren Ort zur Folge hatte. Er entwarf nämlich eine Reihe von sauber in Farben ausgeführten Blättern, welche die handgreiflichsten und beißendsten Anspielungen auf allgemein bekannte Verhältnisse enthielten, und deren überaus witzige Unterschriften so wenig als das Treffende in der Zeichnung Zweifel über die dargestellten Personen walten ließen. Kein Stand und kein Verhältniß war hierbei verschont worden. Einer seiner Freunde hatte es übernommen, die Karikaturen zu verbreiten. Man blieb nicht lange zweifelhaft, wer dieselben gemacht habe, und es wurde sogleich darüber nach Berlin berichtet. Statt daß das Patent, durch welches er als Rath bei der Regierung in Posen angestellt werden sollte, und das schon zur Unterschrift vorlag, ausgefertigt wurde, versetzte man Hoffmann²⁵⁾ als Assessor nach Plozk, wohin er im Frühjahr 1802 abreiste.

ポオゼンでの戯画事件を伝えるクルツの文章の横には「作戯画誤身」と内容を要約した書き込みがある。同じ官界にある身でホフマンの一件を「他山の石以て玉を攻むべし」と考えてのことなのか、単なる感想にすぎないのか明らかにすることは出来ないが、鷗外の心に訴える何かを持っていたということであろう。もしも「他山の石」というつもりで鷗外がこの五文字を書いたのであれば、彼は自身多少その危険を感じたベルリン時代(1887年4月16日～1888年7月5日)に『ホフマン作品集』を読んだのではないかと、いう可能性が出てくる。ベルリン時代の鷗外の生活については小堀氏の『若き日の森鷗外』に詳しいが、『獨逸日記』から興味ある部分を少し引いてみる。「福島大尉頃ろ此に至る。亦臨む。福島は公使館附の士官にして、在獨逸陸軍留學生取締の命を帯ぶ。余も亦取り締まらるる一人なり。」²⁶⁾。「頃日専ら菌學を修む。北里、隈川の二氏と師の講筵にて出で會ひ、週ごとに一二度郊外に遊ぶより外興あることもなし。」²⁷⁾。「前街は土瀝青を敷き、車行聲なく、夜間往來稀なれば、讀書の妨となることもなし。」²⁸⁾この直後に武島務の件が起きるのである。第一の可能性はこの時期に読んだということ、第二の可能性は、1887年11月26日、大和会例会での演説が不評に終わった後

である。カールスルーエの国際赤十字会議での大活躍に満足し、恐らく他の邦人に対して多少の優越感を抱いていたと思われる鷗外が、謂わば竹箆返しを食わされるのが大和会での演説であり、11月26日に日本語で、ほぼ同じ趣旨ながら翌1888年1月2日にドイツ語で行っている。これが意に反して評判が悪かったのである。『ホフマン作品集』に件の逸話を見付けて自戒の意を込めて「作戯画誤身」と書き込んだかもしれない、というのが第二の可能性である。いずれにせよ「奇人」ホフマンを紹介するには絶好の材料であったにちがいない。種を明かしてしまえば何のこともないが、鷗外の知識のもとを知らなかった当時の人々は、正にその博識ぶりに圧倒されるような思いを抱いたことであろう²⁹⁾。

* * * * *

ホフマンが小説玉を懐いて罪あり（水沫集二五七面）を；このごろオットオ、ルウドギヒ劇に作りぬ。もとかの小説はニユルンベルヒの記録家ワアゲンザイル Wagenseil が物語より出でたり。老いたる伯爵夫人の家に夜美しき飾をおくりしこと、そのおくりし人は飾を持ちて情婦の許にゆく貴人を殺す賊の群なりきといふこと、夫人が嘗て國王にかの賊の事を問はれて、

Un amant qui craint les voleurs, N'est point digne d'amour.

の句を吟ぜし恩に感じてこの贈をばしたるなりといふことなど、皆ワアゲンザイルが物語に見えたり。されどかの物語にては、此事メントノン夫人の戯謔に出できとありしを、ホフマンはまことの賊のしわざなるやうに作りかへたりき。ホフマンも賊の群ありとはいはねど、打金匠カルヂリヤツクといふ一人の賊を造り出して、その婿をか飾のおくり手にしつ。このたびの劇はホフマンが意匠をふたゝび變じて、ホフマンが主人公にせし老夫人を餘所にし、かへりて打金匠を浮きいださせたり。そのシエクスピイヤに倣ひし手際の未だしきところをば、流石のエルンスト、キルデンプルツフも補ふこと能はざりしなるべし³⁰⁾。

前に挙げた文が E.T.A.ホフマンの人物を語っていたのに対して、この文章は自分が翻訳した物語にふれている。一見オットー・ルートヴィヒの劇を紹介する体裁をとっていながら、実際にはホフマンの物語への言及が主になっている。あたかも自分で Wagenseil の物語を読んで調べたかの如く書いているが、勿論鷗外は読んでいないと思う。ホフマンに „Das Fräulein von Scuderi“ を創作させるきっかけとなったのは Wagenseil の „Nürnberger Chronik“ に載っていた Anekdote であって、「記録家ワアゲンザイルが物語」ではなかったのである。『玉を懐いて罪あり』を発表した時、鷗外は『附「シヤンプル、アルダント」の由來』

を添えたが³¹⁾、これは実際には „Das Fräulein von Scuderi“ の本文にある記述を要約したもので、翻訳文からは省いた部分であった。それと同じことを物語そのものについてもしたのだと思う、多分「ワアゲンザイルが物語」を読んだかの印象を与えようとして。いずれにせよ鷗外が物語という考えにとらわれなかったならば、当時としては(1818年3月)随分と年代記や史書などを参考にして創作に励んだ E.T.A.ホフマンの姿勢を知っていたら、鷗外は自分との近さをホフマンに対して感じたかもしれない。少くともホフマンに対する接し方、以後のホフマンへの言及が変わっていたかもしれないと思う。

* * * * *

昔は Ernst Theodor Wilhelm Hoffmann といふ詩人ありき。其初作の書に誤りて E. T. A. Hoffmann と署したり。ホフマンはこれがために、Wilhelm を改めて Amadeus となし、人に語りて云く。我既に A を以て通用し、世既に此貨幣の價を認めれば、我は復たこれを更へざるべし。(„Da ich einmal mit dem A coursiere, und die Münze gangbar ist, so mag ich es nicht ändern.“) ホフマンは初作によりて得たる誤謬の名を惜みて、終に永く其誤謬の名を名とせり。我豈世人の必ず訛傳すべきを豫知しながら、我著書に署して Mori Rintaro と云ふに忍びんや³²⁾。

前に述べたことを少し形を変えて表現しているにすぎない。山櫻生なる者が「森は横文の刺に、Rintaro Mori と署したり。我風習にては、姓を前にし名を後にす。……森が我風習を守らざるは、國民の義務に背けるなり。」と鷗外を難じたのに反論している中で、「著述家の用心は我聲名の傳播を願ふものなり。……凡そ社會に立ち現はるゝものは、皆其始を慎む。若し最初の著述にして、誤りたる名を傳へば、著述家の不利實に言ふに堪へず。」と述べたのに続けて、自分の立場を主張する支として述べた文章である。現代の我々が考えればおよそ滑稽この上もないようなことが非難されているわけで、当時の鷗外の微妙な立場を窺わせている。名前なんて歐米ではこんな風に変えることだって出来るのだ、と山櫻生の田舎紳士ぶりを揶揄する気持をこめながら表向は論陣を張っているのである。それも、自らの翻訳『玉を懷いて罪あり』を通じてしか知られていない E.T.A.ホフマンを引合に出して、先方と自分との知識の差の大きいことを示し、自説の擁護をはかるべく相手を自分の土俵に引っぱりこんで相撲を取っているわけで、戦術としては確かに有力であったと思う。元来文学修業を旨としてきたわけではない鷗外が彗星の如く文壇に登場してきたわけで、当然激しい抵抗があったであろう

し、一方鷗外としてもそのような論戦は覚悟の上で出来るだけの準備もしていたであろう。名刺に印刷された名前がどうであろうとも、鷗外が文壇活動をしない一医学者であったなら到底問題になどならなかつたらうし、鷗外とてもそれに反論を加えるということはしなかつたと思う。その意味では、どこからどんな攻撃が来るかしれなかつたわけで、自論を展開するばかりでなく反論にも気を配らなければならなかつたのが、当時の鷗外の立場であつたといえよう。「横文の刺」の問題が、鷗外が予め計算に入れていた論戦であつたのかどうかはさておいても、加えられた攻撃に反論を試み自己の正当性を主張しようとするのに、一つの立脚点になる資料を提供してくれた奇人ホフマンは、鷗外的心中にあつて決して取るに足らない存在ではなかつた筈である。「作戯画誤身」と自ら書いた文字が鷗外の脳裡に閃いたかもしれない。鷗外が E.T.A.ホフマンをどんな詩人としてとらえていたかは所詮不明であるが、自分の名前を奇妙な経緯で変更して泰然としている詩人としてのホフマンの名前は鷗外の心から消えることはなかつた。留学初期に大学で指導を受けた教授の名前と微妙に重なりながら³⁴⁾鷗外の関心を引き続けた結果が、『棕鳥通信』で五度もホフマンに触れるということにも繋がるのではあるまいか。

* * * * *

野暮。「言付け譎吐け太右衛門様」とは苦しい地ぐりかたさ。「惚て見やがれ」を鼻唄に唄ふといふ場合に合はぬ。此作で見るとこの作者も鏡花にかぶれたやうだ。恐ろしいことであるぞ。

洋行がへり。その鏡花かぶれとかいふところには別に説があるよ。一體この作は幻と現との界をぼんやりにははせる趣向と見えるが、E. Th. A. Hoffmann なんぞはさういふ方面で随分おもひ切った事をやって、非難は受けながらも一家をなして居るのだ。すゝめる譯ではないが、とても遣る程ならまだ—こんな事ではいけぬ—³⁵⁾。

先に引用した文章の „Der goldne Topf“ に関する箇所がこの意見のもとになっていることは明らかだが、「非難を受けながらも……」のところも、実はクルツの文章を表現を変えて、あたかも自分の判断であるかのように鷗外は書いているのである：

Die Neigung zum Phantastischen verleitete ihn, dasselbe vornehmlich im Grauenhaften und Schauerlichen zu suchen, worin er allerdings eine hohe Meisterschaft entwickelte. Aber so sehr wir seine Kunst bewundern müssen,

so können uns diese Dichtungen kein Wohlgefallen erregen, weil sie uns nicht bloß erschüttern, sondern mit Entsetzen erfüllen, so daß selbst der Körper fieberhaft erregt wird. Solcher Art sind die „Elixiere des Teufels“, sein schwächstes Werk, obschon sich in demselben wahrhaft geniale Einzelheiten finden, und die „Nachtstücke“.³⁶⁾

そして面白いことに鷗外は、ここで「非難を受ける」筈の作品については „Nachtstücke“ に収められた „Das Majorat“ を読んでいたにすぎないと思われ、その意味では E.T.A. ホフマンのプラスの面が際立つ物語だけを知っていたといってもよく、マイナスの面についてはクルツの序文から知識を得たにとどまるのである。

* * * * *

玉を懐いて罪あり。Edgar Poe を読む人は更に Hoffmann に遡らざるべからず。此篇の如き、やや我嗜好に遠きものなるを、當時強ひて日刊新聞に譯載せしは、世の探偵小説を好む人々に、せめては此種の趣味を知らしめんとおもひしなり³⁷⁾。

『玉を懐いて罪あり』を翻訳した明治22年から、『改訂水沫集序』が出るまで17年経っている³⁸⁾。我国の文壇に登場しようとしていた頃を思い出しながら書いている鷗外の、書いた時点での気持は或いはこの文章のとおりであったかもしれないが、翻訳をする時に「世の探偵小説を好む人々に、……」と思っていたとはとても信じられない。17年後にそれらしい理由をつけただけではないのだろうか。

『ドイツ短篇集』で „Das Fräulein von Scuderi“ を読んだ時、それは深夜でもあって鷗外は「使人不覺慄然」と書いた。しかし、翻訳の原本として鷗外が用いた『ホフマン作品集』にクルツは次のように書いているのである：

Von hoher Schönheit und das reinste Wohlgefallen erregend sind dagegen diejenigen Dichtungen, in welchen er seine Vorliebe zum Phantastischen und Schauerlichen so weit beherrscht, daß es, wenn auch scharf hervortretend, doch die Grenzen der poetischen, ja selbst der historischen Wahrheit nicht überschreitet. Zu diesen gehören vor Allem „Doge und Dogaresse“, „Das Fräulein von Scuderi“, „Meister Martin der Küfer und seine Gesellen“ u. a. mehr. Eine der trefflichsten Erzählungen ist ferner „Signor Formica“, in welchem der Dichter den köstlichsten Humor entfaltet.³⁹⁾

単に慄然としてすませる作品ではない、ということも鷗外は感じたのではないだ

ろうか。ドイツの単稜の中でも傑作に属するといわんばかりの評価と、自分が読んだ時に抱いた感想とのあまりに大きな相違が、或いは日本の読者の反応を待ってみようとの思いとなって、鷗外をこの物語の翻訳へと駆り立てたのではあるまいか。いずれにしても文学者として未だ名をなしていなかった鷗外が、啓蒙の意図を以て翻訳するのに探偵小説を選ぶということはとても考えられない。小説論に熱を入れ始めていた鷗外の小説分類は単稜、複稜、奇話であって、探偵小説という独立したジャンルはなかったし、かといってこの三種のジャンルのどこに含むべきか明確にすることはむずかしく、小説論を展開する上で「探偵小説」は鷗外のマイナスになることはあれ、プラスになることはありえなかった筈である。『玉を懐いて罪あり』は明らかに単稜として翻訳紹介しようとしたのであって、それ以外の意味はなかったと思う。「世の探偵小説を好む人々に、……」というのは、文壇における地位も確固不動のものとなり、E.T.A.ホフマンからE.ポーへという文学史の意味も知っていた鷗外が、自分がE.T.A.ホフマンを最初に翻訳紹介したことを示しながら、文字どおり文壇に出ようとしていた時に試みた翻訳の仕事に敢えて特定の意味を与えようとしたのであって、偶々それが探偵小説の元祖ともいえるものだったということであろう。『調高矣洋絃一曲』、『緑葉歎』と並んで最も早い時期に、しかもドイツ文学中最初に翻訳発表したものだけに、文壇での地位も定まったところで特定の意味を与えたいという気持があって不思議ではない。

* * * * *

Heinrich が愛して居る祖父のかたみの violin の由來は、面白い挿話 (Episode) で、逆旅に狂死する此樂器の初の持主は、Hoffmann が作中の人物に髣髴して居る。此持主が夜半に起きて、鼠共を踊らせると云って Violin を弾ずるところは、頗る妙だ⁴⁰⁾。

「Emil Strauss の評判の小説 Freund Hein を読んで見た。」で始まる、謂わば小説短評なのだが、不思議なほど打切棒に Hoffmann の名前が出ている。E.T.A.ホフマンなど当時の日本でそれほど知られた名前ではあるまい。『猫文士氣談録』を除けば、鷗外が訳した『玉を懐いて罪あり』と鷗外自身の言及以外、ホフマンに触れたものはなかったと思う。明治39年に『吾輩は猫である』が出て、その関係でホフマンの名が多少挙げられることになるが、それとも『カーテル・ムル』が中心で、その著者ホフマンが論の中心に置かれることはなかったのである。そ

れをこういう形式で、それも無造作に言及することで鷗外の中に E.T.A.ホフマンが自然に栖んでいることが、換言すれば鷗外がホフマンを決してないがしろにはしていない様が窺えるのである。それは或いは、世の人々の無知をしりめに自分は知っているのだ、Emil Strauss であれ E.T.A. Hoffmann であれ、という鷗外のポーズであったかもしれないが。「Hoffmann が作中の人物に……」というところは、鷗外が読んでいた作品から考えると „Rath Krespel“ だと思うが、この物語が当時果たして何人の人に読まれていたのだろうか。鷗外の記述に大抵の人は驚嘆の念を覚えたであろう。

* * * * *

漱石さんが猫を書いた時 E.T.A. Hoffmann の Kater Murr は引合に出されたが、その外にも猫文学はある。尤も Abbé Galiani 「猫の子に與ふる教訓」は書くと言ふ豫告ばかりで、とうへ書かれずにしまった。千八百四十年代に

Balzac

が「イギリス猫の胸の悩み」を書いた。略同時に

Holtei

が「靴を穿いた猫」を書いた。⁴¹⁾

鷗外が『ホフマン作品集』に収められた物語以外のもの、従ってここに鷗外自身が挙げた „Kater Murr“ も多分読んでいなかったであろうことがこの文章からも推察される。読んでいて鷗外が、そこで Murr から御先祖様として敬意を表されたティークの『長靴をはいた牡猫』の名を挙げないとは考えがたいからである⁴²⁾。取り立てて漱石を弁護しているわけでもないのだが、或いは『猫文士氣録』を読んで漱石の猫のことが記憶に残っていたところに、何らかの機縁で三人の猫のを知り、自分の知識の博なることを示そうとしたのもあろうか。困みに明治43年(1910)現在での漱石に対する鷗外の態度は、その文章から判断出来る範囲ではそれほど積極的ではないまでも大旨好意的である⁴³⁾。バルザックに関しては „Das Haus zur ballspielenden Katze“ を含むレクラム本を持っていて、もしもこれが鷗外の言う「イギリス猫の胸の悩み」であれば、鷗外はライプツィヒ時代に読んでいたと推定されているが、他の二人のものも含めてその内容がホフマンや漱石の猫と果たしてどの程度似通っていたのかは、この文章を書いている鷗外の意図とは無関係であったと思う。

『棕鳥通信』の中で鷗外は他に四度 E.T.A.ホフマンに言及している。いずれもたいした意味があるとは思えないが、E.T.A.ホフマンに対する鷗外の関心を示

す資料にはなると思うので列記しておく：

伯林の Henrici で文士の手紙が競賣になった。代價の二三を左に。

Schiller (子の病を醫師に頼む文)	Mk 410
Byron (英語を希臘字で書いてある)	325
Heine (巴里からの政治的情報)	230
E. Th. A. Hoffmann (著述出版に關する用事)	180
Kant (料理を貰った禮)	155
Hebbel (軍艦費義捐の事)	210
Melanchthon (Luther の書狀の寫)	110
Gerhart Hauptmann (著述上の用事)	85 ⁴⁴⁾

Franz Kugler の遺物が競賣になった中に

E. T. A. Hoffmann

の諷刺畫七十三枚の帖があつて、二千五百マルクに賣れた。⁴⁵⁾

Karl Geibel, Karl Herz von Hertenried の有名な名家自筆のコレクションがライプツヒの骨董店 C. G. Boerner の手で競賣せられる。宗教家では Calvin, Erasmus, Uluich von Hutten, Martin Luther, Zwingli, 文士では Goethe, Heine, E. T. A. Hoffmann, Lessing, Schiller, Wieland, Beaumarchais, Béranger, Hugo, La Rochefoucauld, Moore, Rousseau, Swift, Voltaire, 美術家では Raffaello, Rubens, Cornelius, Delacroix, Kaulbach, Mengs, Canova, 音楽家では Beethoven, Bach 等の自筆がある。Wagner の書狀もある。⁴⁶⁾

Napoli で懸賞を得たオペラの題は Hoffmann と云ふので、主人公は

E. T. A. Hoffmann

である。⁴⁷⁾

以上が鷗外と E.T.A.ホフマンを直接結びつける資料だが、あと一つ間接的にはあるが二人を結ぶものとして Eduard Stucken の „Myrrha“ を訳した『飛行機』がある：

少女。エエ・テエ・アア・ホフマンなのね。まあ。全集なのね。

主人。全集が欲しい欲しいと、お前は云つてゐたぢやないか。

少女。そしてこれはキイツなのね。おやミュツセエもあるわ。それにシエリイもあるのね。お父うさんこれではひどいは。⁴⁸⁾

娘への誕生祝に父が贈る書物の真っ先に、E.T.A.ホフマンの全集が挙げられているのである。翻訳した作品の中に偶々ホフマンの名が出てきたというだけの

ことだが、キーツ、ミュッセエ、シェリーの前に置かれていることは鷗外に何らかの感想を与えたのではあるまいか。原作の出版が1909年で、⁴⁹⁾ 訳出は明治43年(1910)6月から9月にかけてである。ということはこの作品を翻訳したあとで鷗外は、五度にわたって『棕鳥通信』にE.T.A.ホフマンに関する記述を載せているということなのである。単稗、複稗、奇話三つのジャンルのうち奇話の代表格としてE.T.A.ホフマンを挙げてはみたものの、小説全体の中での奇話の位置など考えると、ホフマンに対する評価は鷗外自身にとってもむずかしかったのではないだろうか。鷗外が読んだ頃のE.T.A.ホフマンは、ドイツ文学史において失った評価を未だ回復してはいなかった。ドイツにおいて„Hoffmann-Renaissance“が始まるのはやっと世紀末になってからであり、研究が盛り上がるのは今世紀に入ってからのことである。⁵⁰⁾ 『玉を懐いて罪あり』は、単にE.T.A.ホフマンを我国に最初に紹介した翻訳になったばかりでなく、鷗外が翻訳したドイツ文学の最初の作品ともなった。作家として、評論家として文壇での地位が変化してゆくに つれて複雑になったと思う鷗外の心境を、それ以後のホフマンへの言及に垣間見る思いがするのである。

E.T.A.ホフマンに対する鷗外の姿勢について推察を交えながらではあるがもう少し述べてみたい。E.T.A.ホフマンの作品のうち、最初に読んでしかも強烈な印象を受けたのが、„Das Fräulein von Scuderi“で、それが奇話で且つホフマンの傑作の一つでもあるわけだから、鷗外がE.T.A.ホフマンの作品を翻訳するにあたって„Das Fräulein von Scuderi“を選んだことは自然な成行であったといつてよいだろう。ここでは鷗外が何故自分が紹介するドイツ文学の中から、いの一の作家としてE.T.A.ホフマンを選び、しかもその作品をたった一篇だけ翻訳したのかという点について論じてみたい。鷗外は„Das Fräulein von Scuderi“が„Die Serapions-Brüder“という作品集に収められている物語であることは、『ホフマン作品集』の序文を読んで知っていたが⁵¹⁾、その知識は„Serapion“に関しても、又ホフマンに関しても『ホフマン作品集』の域を殆ど出ていなかったと思う。その限りにおいて鷗外はE.T.A.ホフマンを奇話作家として認識していたわけであり、それは鷗外自身とは相容れない存在であったということになるだろうが、もしも鷗外が„Die Serapions-Brüder“を読んでいたなら、彼はそこに自分と同じく歴史を重んじるE.T.A.ホフマンの姿を見つけた筈である。鷗外は大正5年(1916)、『梶原品』と『澁江抽齋』の中で自分の創作態度ともいえることを次のように書いた。「私は此伊達騒動を傍看してゐる綱宗を書かうと思つ

た。外に向って發動する力を全く絶たれて、純客觀的に傍看しなくてはならなかった綱宗の心理状態が、私の興味を誘ったのである。私は其周圍にみやびやかにおとなしい初子と、伶俐で氣骨のあるらしい品とをあらせて、此三角關係の間に靜中の動を成り立たせようと思った。しかし私は創造力の不足と平生の歴史を尊重する習慣とに妨げられて、此企を拋棄してしまった。」⁵²⁾、「わたくしの抽齋を知ったのは奇縁である。わたくしは醫者になって大學を出た。そして官吏になった。然るに少い時から文を作ることを好んでゐたので、いつの間にやら文士の列に加へられることになった。其文章の題材を、種々の周圍の状況のために、過去に求めるやうになってから、わたくしは徳川時代の事蹟を搜つた。そこに武艦を検する必要が生じた。」⁵³⁾。一方 E.T.A.ホフマンは、„Die Serapions-Brüder“の中で「そこではすべてが本物の歴史を基盤にしているからこそ効果をあげているのだ。」⁵⁴⁾、「ゆらゆらと虚空にゆらいでいる精神ではどう骨折ってみても創り出せない独特なものを歴史が提供してくれる、ということには疑問の余地がない。同様に、ある民族又はその民族の中の特定な一つの階級が持っている歴史的な慣習、風俗、因襲を巧みに利用すれば、他ではとても得られない独特な生彩が文学に与えられるのだ。」⁵⁵⁾と述べ、W.スコットのことを「現実を、歴史的な真実を把握する技量こそが、近年我国でも有名になってきたある作家の作品を秀でさせているのではないだろうか。」⁵⁶⁾と高く評価しているのである。„Die Serapions-Brüder“に収められた物語のうちでホフマンの傑作とされ、『ホフマン作品集』にも入っていて鷗外も読んでいた「正にゼラーピオンの」と称された三篇„Doge und Dogaresse“, „Meister Martin der Kufner und seine Gesellen“, „Das Fräulein von Scuderi“はすべて歴史を基盤にした物語であるし、年代記、史書を利用し参考にした E.T.A.ホフマンの創作態度は鷗外のそれと変わらない。更に、„Die Serapions-Brüder“は鷗外が『雲中語』で七人の文学談義という形をとっているその原型ともいえるものである。鷗外の『雲中語』が„Die Serapions-Brüder“を模倣したというつもりはないが、クルツの序文で紹介された„Serapion“からは合評会風の集いが生ずるような気がするのであって、鷗外が„Die Serapions-Brüder“を読んでいても果たして『雲中語』が同じ形態でありえただろうかと思う反面、„Die Serapions-Brüder“を読まずに『雲中語』が生じているところに二人の近親性を感じるのである。鷗外自身ドイツにあってその劇を観賞し⁵⁷⁾、翻訳発表に際しては第一番にとりあげたカルデロンについても、その戯曲を誰にもまして高く評価し、本物のカルデロン劇といわれるものをゲータと殆ど時を同じくして舞台にのせたのがバムベルク時代のホフマンであり⁵⁸⁾、更に自分に最も深い

感銘を与えた三つの作品の一つとしてホフマンはカルデロンの „Die Andacht zum Kreuze“ を挙げているのである⁵⁹⁾。

近親性を意識せず、E.T.A.ホフマンの真の姿に接近しようとしなかった鷗外が、唯一篇とはいえホフマンの作品を日本語に移したのは何故だったのだろうか。卓抜した語学力で膨大な読書量を誇った鷗外が、その博識ぶりを世に知らしめ、以て遠からず生ずる文芸論争において少しでも優位を占めようとしたのであろうか。少くとも24篇は読んでいたのだから、E.T.A.ホフマンの紹介者になるつもりならその作品を鷗外はもっと翻訳することだって出来た筈である。それをしないで一篇だけ訳したのは、あくまでも自分の文壇活動の一助たらしめようとの策であって⁶⁰⁾、手の内を見せまいとしたのではないだろうか。『栗山大膳』に鷗外自らがその実例も示している⁶¹⁾、当初「ホフマン」となっていた「わが星」の原作者の名が後に「失名」となった事情も理解出来るのである。それとも本能的に近親性を感じた鷗外が以後自分の作品の中に E.T.A.ホフマンの影を探られるのを防ごうと、一篇を翻訳したあと敢えてホフマン無視の構えを取り続けたのであろうか。『フロルスと賊と』や『刺絡』、『木精』を翻訳し、『ル・パルナス・アンビュラン』を創作した背景に何となく E.T.A.ホフマンが見えるような気がするし、『護持院原の敵討』で江戸から九州にわたって12年がかりで敵を追い求めたり、他人の名を騙った敵虎藏は江戸にいたという設定などは⁶²⁾、鷗外も読んでいた „Der Artushof“ を想起させずにはいないのである。しかし、如何にこのような推定を裏付けそうな現象が存在しようとも、私は鷗外の意図はもっとちがうところにあったと思うのである。既にドイツにいるうちに翻訳を手がけていた鷗外が、その翻訳を足場にして文芸批評、創作活動へと進む意図を抱いていたことは、最早我々が事実として受容してよいことであろう⁶³⁾。しかしながら彼がそのような意図のもとに世に送った最初の翻訳は、既にドイツにいる時から準備を進めていたゲーテでもなければ、同じくドイツ留学時代に十分に読み込んでいたレッシングでもハイネでもなく⁶⁴⁾、カルデロンであったし、ドーデエであった。鷗外の、特にドイツにおける読書の様子を考えれば⁶⁵⁾、カルデロンを訳しドーデエを訳したことはよく理解出来る。問題は、何故準備も十分であったろうしその意味では自信もあったであろうドイツ文学のゲーテやレッシングでなく、スペイン文学のカルデロン、フランス文学のドーデエを先に、それも原語からでなく独語訳をもとにして翻訳したのかであり、ドイツ文学の翻訳に際してはゲーテ、或いはレッシング、ハイネに先立ってホフマンを訳したのは何故かということである。E.T.A.ホフマンについては「深夜讀之、使人不覺慄然」と書かした „Das

Fräulein von Scuderi“ を読んでいたことと、クルツ編の二巻本『ホフマン作品集』を持ってたことしか我々は知らない。それとても、„Das Fräulein von Scuderi“ を読んだ後で鷗外が何らかの興味を E.T.A.ホフマンに対して抱き、二巻本を買い、それを読んで「作戯画誤身」と書き込んだという程度であって、決して E.T.A.ホフマンを高く評価していたからこそドイツ詩人の筆頭に翻訳したということになるのではないのである。

留学以前からドイツに対して深い関心を寄せていた鷗外は、陸軍派遣留学生としてドイツで過した四年間にその文化、風俗、文学などについての知識をたくわえ、又一方では自ら創作するための素材も集め、単にドイツ文学の翻訳、紹介者としてのみならず、文芸評論、創作を通じて文壇に登場するための準備をしていた。しかし、帰国後愈々翻訳を発表するにいたってみると、たとえ翻訳家としての自信はあったにせよ所詮初めてのことであり、特に自分が四年間生活してきたドイツの文学は可能なきぎりきちんと紹介したいという気持も働いて、やはり慎重にならざるをえなかったのではないだろうか。幸いカルデロンは熟読して十分知っているし、別の作品ではあったがドイツの劇場で見たこともある、ドーデエも愛読した、先ずはこの二人の作品を翻訳することで自分の翻訳家としての力量を世に問うてみよう、日本の読者、文学界の反応を見てみようと考えたのではあるまいか。いざとなれば原語からではなく独訳からの重訳だったという弁解だって可能であるし、仮に失敗したにしても本命とするドイツ文学でないならさほどの痛痒も感じなくてすむのである。その程度の計算が策士鷗外にはあったのではないだろうか。そしてその計算をそのままドイツ文学にあてはめたのが、ゲーテ、レッシング或いはハイネに先立って E.T.A.ホフマンから始めるということだったのではあるまいか。E.T.A.ホフマンに対して全然興味を感じなかったわけではないという翻訳への動機がある反面、一風変わった物語という事実は、万一失敗してもそれをその物語のせいに帰することを可能にしてくれているのである。しかももしも E.T.A.ホフマンで成功すれば自分が熟読、愛読して翻訳への準備も十分なハイネ、レッシング、ゲーテへと容易に進んでゆけるし、その成功をステップにして文芸評論は勿論、創作活動すらさしたる障碍もなしに始めることが出来よう、と負けることの嫌だった鷗外が立てた綿密な計画だったと思う。事実その後の鷗外は医学者としての業績を殆ど忘れ去られかねない程、専ら文豪として名をなしたのである。

最後に E.T.A.ホフマンとの関係であるが、鷗外にはホフマンの文学を本気で紹介する気持など最初から毛頭なかったと思う。鷗外を翻訳家という視点でとらえ

ると、このことは一人ホフマンにのみあてはまることではない。鷗外は作家、詩人にこだわることなく個々の作品を紹介しようとした、と思うのである。だからこそ E.T.A.ホフマンの作品も翻訳したのだが、その作品を一篇しか紹介しなかったというところに正に鷗外の計算、評論活動、文芸活動を考へての計算があったと思う。自分では相当な知識を持っていながらその一部だけを示す。しかもそういう知識をドイツのみならず、スペイン、フランス、イタリア、ノルウェー、スウェーデン、ロシア、アメリカ等々と、出来るだけ多くの国の多くの作家、詩人について示すことで、論争相手に自分の知識の博さ、深さに対する予測をさせないのである。鷗外の例えば E.T.A.ホフマンについての知識がどこまで及んでいるのか見当がつかないので、相手は鷗外が提示したものだけに論争の焦点をしぼらざるをえない。そこで鷗外は徐に自分だけが知っていて未だ紹介していない知識を示しながら反撃に転ずるのである。『現代諸家の小説論を讀む』に端を發した論争を例にしても、身勝手に承知の上で勝利を目指したのではないかと思うほどである⁶⁶。勝つことを念頭において、そのためには決して最初から自分の知識を全部は見せないのである。E.T.A.ホフマンの作品などは鷗外が訳さないかぎり未だそれほど知られることはないのである。それでありながら小栗風葉と結びつけたり、Edgar Poe, Emil Strauss とくっつけたりするのである。

カルデロンの『サラメヤ村長』（鷗外訳では『調高矣洋絃一曲』）を読んだあとで鷗外は E.T.A.ホフマンの „Der Zusammenhang der Dinge“ を読んでいると思う。E.T.A.ホフマンに対する感じは「使人不覺慄然」と書いた時とは少しは変わっている筈である。それを全然出さずに „Das Fräulein von Scuderi“ だけを紹介し、そのイメージでホフマンを語り続けるところに策士鷗外を見る思いがする。第三者から見れば素人の鷗外が、謂わば当時の文壇に殴り込みをかけた、というのが鷗外の文壇登場であつたらう。鷗外にすれば決して失敗したり敗北してはいけなかったのである。慎重の上にも慎重に事を運ぶのは当然である。E.T.A.ホフマンとの関係もそのような枠の中でとらえるべきであると思う。文壇に登るための一つのステップとしてホフマンの物語を翻訳したのであり、偶々 E.T.A.ホフマンの方に鷗外という一文豪の中に生き続ける力があつた、ということである。

参考文献

1. 鷗外全集、第一巻。岩波書店、昭和四十六年。(1)
2. 鷗外全集、第七巻。岩波書店、昭和四十七年。(2)

3. 鷗外全集, 第八卷。岩波書店, 昭和四十七年。(3)
4. 鷗外全集, 第十四卷。岩波書店, 昭和四十七年。(4)
5. 鷗外全集, 第十五卷。岩波書店, 昭和四十八年。(5)
6. 鷗外全集, 第十六卷。岩波書店, 昭和四十八年。(6)
7. 鷗外全集, 第十九卷。岩波書店, 昭和四十八年。(7)
8. 鷗外全集, 第二十二卷。岩波書店, 昭和四十八年。(8)
9. 鷗外全集, 第二十四卷。岩波書店, 昭和四十八年。(9)
10. 鷗外全集, 第二十六卷。岩波書店, 昭和四十八年。(10)
11. 鷗外全集, 第二十七卷。岩波書店, 昭和四十九年。(11)
12. 鷗外全集, 第三十卷。岩波書店, 昭和四十九年。(12)
13. 鷗外全集, 第三十五卷。岩波書店, 昭和五十年。(13)
14. 鷗外全集, 第三十八卷。岩波書店, 昭和五十年。(14)
15. ホフマン作品集。Hoffmanns Werke (in 2 Bdn.). Herausgegeben von Heinrich Kurz. Leipzig, Verlag des Bibliographischen Instituts. o. J. (15-1). (15-2).
16. E. T. A. Hoffmann: Die Serapions-Brüder. Winkler-Verlag München, 1963. (16)
17. 小堀桂一郎: 若き日の森鷗外。東京大学出版会, 1969年。(17)
18. 吉田六郎: 『吾輩は猫である』論。勁草書房, 1968年。(18)
19. Rudolf Köppler: E. T. A. Hoffmann am Bamberger Theater. Historischer Verein zu Bamberg, 81. Bericht. Bamberg, St. Otto-Verlag, 1929. (19)
20. 比較文学研究 6。東大比較文学会, 昭和三十二年。(20)
21. 東洋大学大学院紀要, 第十八集。昭和五十六年。(21)

注

- 1). 『航西日記』。(13): 83頁。
- 2). (17): 28頁。
- 3). (13): 88-90頁。
- 4). (3): 199頁。
- 5). (20): 106-137頁 (寺内ちよ: ドイツ時代の鷗外の読書調査)。(17): 34-48, 53-60, 71-81, 117-125頁。
- 6). 「十八日。飯島魁発軌す。送りて停車場に至る。」。(13): 93頁。
- 7). (13): 102頁。尚, 大学が休暇に入ったのは8月8日である。同: 101頁。
- 8). Paul Heyse & Hermann Kurz (ed.): Deutscher Novellenschatz (in 24 Bdn.). München, Verlag von Rudolf Oldenbourg. 1871-1873.
- 9). (20): 120頁。(17): 37頁。
- 10). Paul Heyse & Ludwig Laistner (ed.): Neuer Deutscher Novellenschatz (in 24 Bdn.). München, Verlag von Rudolf Oldenbourg. 1884-1887.
- 11). (21): 317-355頁 (神田孝夫: 鷗外森林太郎帰国前後の鬱屈と憂悶)。
- 12). 原題 (独訳): Der Richter von Zalamea. 1月3日から2月14日まで, 12回にわたって『讀賣新聞』に掲載された。

- 13). 原題(独訳):Kadur und Käthe. 2月22日に『讀賣新聞』に掲載された。
- 14). 3月5日から7月21日まで13回にわたって掲載された。
- 15). 因に『猫文士氣談録』(明治39年)を出した藤代禎輔(素人)が管虎雄と共に独逸文学科の第一回卒業生として東大を終えたのが明治24年(1891)で、その船旅が「漱石に猫についての知識を与えた」といわれる渡欧は明治33年(1900)、実際に東大独逸文学科でE.T.A.ホフマンを講じたのは明治36年(1903)であった。(18):24-30頁。
- 16). (7):41-42, 618, 672頁。
- 17). (16):457-458頁。
- 18). (15-2):93, 96, 99頁。
- 19). 『今の批評家の詩眼』。(8):94頁。
- 20). 鷗外が文芸評論を展開するにあたって拠所とした書物のうち、ここで特に関係が深いのは Rudolf von Gottschall: Poetik, Die Dichtkunst und ihre Technik. Trewendt, 1882. であるが、その点については(20):27-53頁(神田孝夫:鷗外初期の文芸評論)、特に35-42頁に詳しい。
- 21). (15-1):10頁。
- 22). (17):440頁。
- 23). 『観潮樓偶記 その一』に「鬼才」の題で。(8):491-492頁。
- 24). (15-1):5頁。
- 25). 同上:5-6頁。
- 26). 1887年5月29日。(13):165頁。
- 27). 1887年6月1日。同上:165頁。
- 28). 1887年6月15日。同上:166頁。
- 29). (17):426頁。
- 30). 『観潮樓偶記 その一』に「壁を懐いて罪あり」の題で。(8):532-533頁。
- 31). (1):154-155頁。
- 32). 『傍觀機關』に「五たび反動機關を論ず」の題で。(12):528-529頁。
- 33). 同上:524頁。
- 34). Franz Hofmann なので実際には同姓ではない。鷗外流に図式を加えると、医学者として Pettenkofer と Koch が鷗外或いは日本医学界にとって持つ意味を、ドイツの詩人では Lessing と Goethe が持っていたのでのあって、留学初期の師である Hofmann と翻訳家鷗外が初期に扱った作家 Hoffmann とは、最も重要な意味を持つ二人へと道をひらいているわけで、その役割においても奇妙な重なり方をしているのである。
- 35). 『雲中語』に「五分時間」の題で。尚この「五分時間」は小栗風葉作。(9):379頁。
- 36). (15-1):10頁。
- 37). 『改訂水沫集序』。(14):193頁。
- 38). 序には明治三十八年四月森林太郎識とあるが、発表されたのは明治39年5月である。(14):194頁。
- 39). (15-1):10頁。
- 40). 『妄人妄語』。(10):19頁。
- 41). 『棕鳥通信』。(11):556頁。
- 42). Ludwig Tieck: Der gestiefelte Kater. 1797.

Vgl.: „Ja mein Leser? – ich hatte einen Ahnherrn, einen Ahnherrn, ohne den ich gewissermaßen gar nicht existieren würde …… als der weltberühmte Premierminister Hinz von Hinzenfeldt der der Welt so teuer, so über alles wert worden unter dem Namen *des gestiefelten Katers*.“ (E. T. A. Hoffmann: Lebensansichten des Katers Murr. Winkler-Verlag München, 1964. S. 350).

- 43). 『夏目漱石論』。(10) : 407-408頁。
- 44). (11) : 244頁。
- 45). 同上 : 399-400頁。
- 46). 同上 : 495頁。
- 47). 同上 : 708頁。
- 48). (2) : 43頁。
- 49). E. Stucken : Myrrha, Berlin, Verlag von Erich Reiß, 1909.
- 50). E.T.A.ホフマンがドイツで忘れられてゆく過程や、その後の復権ぶりについては Klaus Günzel : E. T. A. Hoffmann. Berlin, Verlag der Nation, 1976. 438-494頁に解りやすく記されている。
- 51). „Die Serapions-Brüder“については9頁に、その脚注に „Serapion“ についての記述がある。
- 52). (6) : 220頁。
- 53). 同上 : 261頁。
- 54). 55). 56). (16) : 924頁。
- 57). 明治19年(1886)3月14日にミュンヘンの Residenztheater で、カルデロンの『怪夫人』 („La dama duende“) を見たことが『獨逸日記』に記されている、(13) : 136頁。他にカルデロンの劇を見たかどうかを明らかにしうる資料はないが、鷗外がカルデロンを愛読していたことは事実である。詳しくは(20) : 72-105頁(島田謹二 : 若き鷗外と西洋演劇)、特に91-96頁参照。
- 58). (19) : 45頁。
- 59). 1812年4月28日付 Hitzig 宛の手紙でホフマンは、「僕に深い印象を与えた作品は三つだけでした, „das Kätschen“, „die Andacht z (um) K (reuze)“, それに „Romeo und Julie“ ですが, これらの作品が僕を一種の詩的な夢遊状態へと誘い, その状態の中で僕はさまざまに壮麗且つ輝かしい形態となって現われる Romantik の本質を, しかと認識したと思ったのでした」と告げているし (E.T.A. Hoffmann : Briefwechsel. Erster Band. Winkler-Verlag München, 1971. S. 335), カルデロンの戯曲の上演について小論も書いている („Über die Aufführung der Schauspiele des Calderon de la Barca auf dem Theater in Bamberg“. E.T.A.Hoffmann : Schriften zur Musik, Nachlese. Winkler-Verlag München, 1963. S. 595-601)。
- 60). 文芸評論を始めるにあたって鷗外が細心の注意を払っている様子は, 神田氏も指摘しているところである。(20) : 27-29頁。
- 61). (5) : 623-650頁, 特に645-649頁。
- 62). (4) : 403-439頁。
- 63). (17) : 373頁以下に詳しい。
- 64). 鷗外のゲーテ, レッシング, ハイネについての読書ぶりは(17) : 46, 55, 75-77,

119-120頁参照。『獨逸日記』の中で鳴外と翻訳とを結びつける箇所は明治18年（1885）12月27日の「ギョオテの『ファウスト』Faustを譯するに漢詩體を以てせば何如杯と語りあひ、巽軒は終に余に勸むるに此業を以てす。余も亦戯に之を諾す。」である。（13）：122頁。

65). (17) : 72-73, 117-119頁。

66). 同上 : 440頁。